

談話のコソア指示におけるメンタル・スペースの働き

4D-1

今野 裕司、中川 裕志

横浜国立大学 工学部

1. はじめに

談話においては言語の効率を上げるために、コソア指示などの指示詞をしばしば用いる。このコソア指示に何等かの法則性を見いだそうとする研究が盛んに行われている。本稿ではGilles Fauconnierによるメンタル・スペース理論¹⁾を用い、コソア指示の定式化を試みる。

2. 談話とメンタル・スペース

談話において設定されるスペースを基底スペース、相手スペース、談話スペースとする。それぞれの役割を示すと次のようになる。

・基底スペース

自分を中心として設定する心的スペース。自分の知覚できる現場、過去の記憶に相当する非現場を記述する。

・相手スペース

自分の基底スペースに対して、「相手がこう思っているであろう」と自分が思っている相手の持つ知識が存在するスペースである。

・談話スペース

話者が基底スペース内の知識に関する要素を談話に導入したり、相手が知っている知識について言及したりするときに要素が設定されるスペースである。談話においてあらわれた要素はすべてここに設定される。

3. コソア指示とメンタルスペース

ここで一つの例文により、上のそれぞれのスペースがどのような働きを持つかを考えてみる。またそれによってコソア指示の法則性について考察する。

- (1) A: 昨日山田に会いました。あの人/*その人/?この人はいつも忙しそうにしている。
- (2) B: えっ。その人/*この人/*あの人 誰?
- (3) A: ほら、この前紹介した学者さんですよ。
- (4) B: ああ、思いました。その人/あの人/*この人がどうしたって。

(1)で、Aは「山田」という言い方をしないで、AとBの両方が知っていると思っている特定の人「山田」を使っている。これにより、Aの基底スペースには「山田」が存在し、Aは相手Bが「山田」を知っていると思えることがわかる。

ここで「…という人」という言い方は他にも「私の知合いの山田」や「有名な学者の山田」という言い方もで

きる。これらに共通なのは「山田」という人をなんらかの形で説明している点である。このように相手が知らないと思われる、または相手にあまり馴染みのない人のことを話すときは、その人の注釈をつけるのが普通である。これをメンタルスペース的に言うと次のようになる。

・話し手がある人aについて述べる時、それが自分の相手スペースに存在していない時は、「aという人」のようにその人についての属性をつけて話す必要がある。これは、相手にaについてのスペースを設定させるスペース導入表現である。

このことをふまえて考えてみると、基底スペースや、相手スペース中には、山田スペースのような特定の人についてのスペースが存在し、その中にその人についての知識が存在するものと考えられる。そして話し手は、もし話したい人のスペースが相手スペースに存在しないのなら、その人のスペースを相手が設定できるようなスペース導入表現を使って発話するのである。これは人だけでなく何かの事物について発話する場合も同様であり、相手にとって未知であるような事物に対して突然その名前だけを用いることはありえない。

(1)においてAの持つ相手スペース中に山田スペースが存在していると述べたが、ここでこれらのことを次のように表記する。まずAの持つ基底スペースを S_A 、相手スペースを S_{AB} とする。また特定の人aについてのスペースを人物スペース S_a とし、これが基底、あるいは相手スペース中に存在することを次のように書く。

$$S_a \subset S_A, S_a \subset S_{AB}$$

また存在しないことは次のように書く。

$$S_a \not\subset S_A, S_a \not\subset S_{AB}$$

そうすると「知っている」ということは基底スペースに存在するかないかで表せようであるが、相手スペースにおいてはうまくはいかない。相手がある人を知っているか知らないかがわからない場合があるからだ。よって相手スペースに人物スペースが存在するかないかわからないということも別に表記する必要がある。

ここで今度は(1)の第2文に出てくるコソア指示について考えてみる。この文で「山田」を指してコソア指示をする場合「あの」を使う。ここで仮にAが「もしかしたらBは山田のことを知らないかもしれない。」と思い、あらかじめ「昨日山田に会いました。」と言ってから、「その人/この人はこの前紹介した学者です。」と付け加えるような特別な文脈の場合は「その」や「この」でも指示できる。これはやや先走りした表現とも思える。例えばその付け加えの文の前に途中で発話をさえぎってしまえば、「山田って誰?」ということになってしまう。

また先ほど述べた、「山田という人」という言い方の時には逆に「その」や「この」で受け、「あの」はあまり使わない。「あの」を使うのは、その人について自分の思い出を語るような時である。次にその例を挙げる。

- (5) A : 昨日山田という人に会いました。*あの人は学者さんです。
 (6) A : 昨日山田という人に会いました。あの人、この間は妙な格好をしていたなあ。

(5)の第2文は「その／この」であれば構わない。以上より、「あの」は自分の記憶にある、すなわち基底スペースにある要素を指し示すのに用いられ、「その」や「この」は談話スペースもしくは相手スペースに設定された要素を指し示すために用いられると考えられる。

今、「山田」と「山田という人」を使った場合のコソア指示の違いをみた。文献1)では名前も役割になり得ることが述べられているが、(5)の「山田」は聞き手にとってみれば役割 r であり、「…という人」や「私の知合いの…」というのはその役割の属性 $P(r)$ である。それに対して(1)の「山田」は値 a である。よって次のことが言える。なおAの持つ談話スペースを D_A 、と書く。

- ・人物スペース S_a が基底スペース S_A 、相手スペース S_{AB} 両者に存在するとき ($S_a \subset S_A$, $S_a \subset S_{AB}$) は、 S_a のスペース主を記述するには値 a だけをを用い発話する。また、この発話により談話スペース D_A 、 D_B にその値 a が設定される。
- ・人物スペースが基底スペースだけにしか存在しないとき ($S_a \subset S_A$, $S_a \not\subset S_{AB}$) は、 S_a のスペース主を記述するには、役割 r + その役割の属性 $P(r)$ 、を用いる。この時その $r + P(r)$ が相手スペースに人物スペースを導入させるスペース導入表現になる。

ここで上に出てきた語句について整理しておく。まず人物スペースとその値について述べる。人間は談話において登場する人物についての知識全体を常に認識しているわけではない。すなわち談話スペースには人物スペースというものは存在せず、発話された文そのものがその談話期間中だけ存在する。その意味で談話スペースは他の基底・相手スペースとは性質を異にする。そしてその談話スペースに登場する人物を値としているのである。

当然そうすると話し手が人物スペースからその値を引き出してやることになるが、それをその人物スペースの名前のようなものとしてスペースに付属しているものとする。これがスペース主である。そしてスペース主=値でもある。

また役割について考えてみる。これは当然基底スペースの中では値 (=スペース主) である。そしてもし相手スペースにその人物スペースが存在しないときには役割として談話スペースに設定する。そして、役割 r + その役割の属性 $P(r)$ 、によって相手スペースに人物スペース S_a を導入させる。しかしここで問題となるのは、その役割がいつ値に変わるかということである。状況によっていろいろであり、例えば「…という人」という言い方は

一回使ってもまた使わなければならない場合もあれば、一回でやめてしまう場合もある。

- (7) A : 昨日山田という人に会いました。その山田という人は私にとっては大恩人です。
 (8) A : 昨日山田という人に会いました。山田は私にとっては大恩人です。

(7)は聞き手にとっては親切な言い方、(8)は逆にやや乱暴な言い方ともいえる。しかしいつまでも(7)の言い方を続けるのもおかしい。従って談話の中で相手が充分その人物について知識を得たことがわかれば、役割は値に変わることができると言えるであろう。

次に聞き手Bが(1)の発話を受けて、(2)のように発話するメカニズムを考えてみる。(1)で S_A 、 S_{AB} ともに山田の人物スペース $S_{山田}$ を持っていた。しかし(2)において S_B は $S_{山田}$ を持っていない。従ってここでは「その」を用いて、「山田」を指示する。ここで、次のように言える。

・談話におけるコソア指示制約

- ・Aは基底スペース・相手スペース両方にその人物スペースが存在する場合のみ用いる。
- ・ソは基底スペースに関係なく、相手スペースにその人物スペースが存在する場合に用いる。

(1)ではコを使うことも可能である。これは談話スペースに設定された値を指示しているためである。基底スペースにはその人物スペースが存在しているのは当然であるが、相手スペースには存在している必要はない。この例として、(4)においてコを使った発話を受けた聞き手はコでその値を指示できない。もし(4)が次のような形であれば、コを使っても構わない。

- (4)' A : ああ、思いだした。山田さんね。？この人がどうしたって。

発話する人がその人物を談話に登場させて初めてコが使える。しかもその発話はあまり遠すぎないことが条件である。

- ・コは自分が談話スペースに設定した値を指示するときに用い得る。ただその時期は離れていてはならない。

4. まとめ

談話における心的スペースを設定することにより、コソア指示に、ある程度法則性を見いだすことができた。今後の課題としてはコ指示にみられた発話時期等を記述する方策を考えていきたい。

【参考文献】

- 1) ジル・フォコニエ 「メンタル・スペース - 自然言語理解の認知インターフェース -」 白水社 1987
共訳：坂原、水光、田窪、三藤
- 2) 金水 敏 「日本語の名詞句の指示性に関する研究と定・不定推定システムの作成」『言語の文脈情報処理の研究』昭和63年度文部省科学研究費補助金特定研究(1)